

経済・金融 フラッシュ

鉱工業生産 10年11月 ～6ヵ月ぶりの上昇、足踏み脱却へ

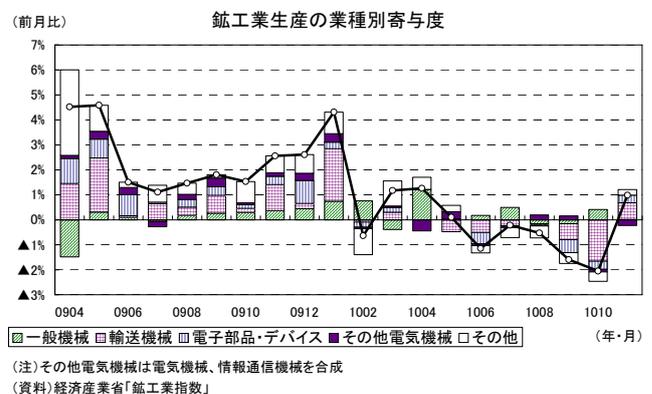
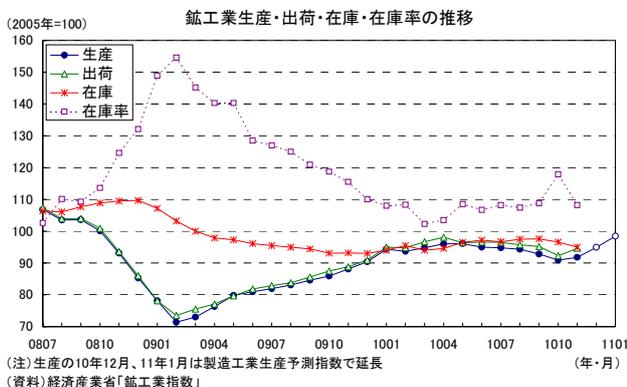
経済調査部門 主任研究員 斎藤 太郎

TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

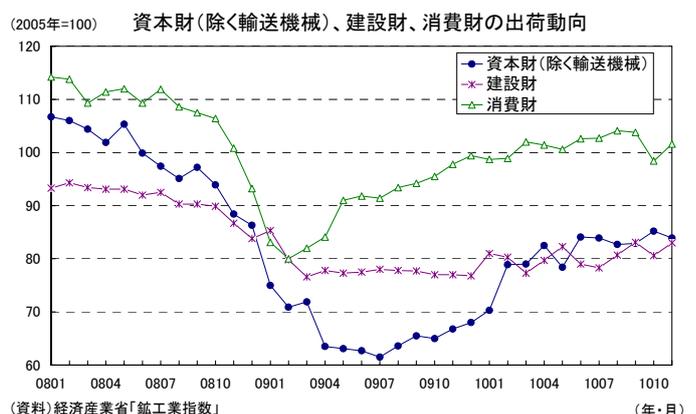
1. 鉱工業生産は6ヵ月ぶりの上昇

経済産業省が12月28日に公表した鉱工業指数によると、11月の鉱工業生産指数は前月比1.0%と6ヵ月ぶりの上昇となり、ほぼ事前の市場予想(共同通信集計:前月比0.9%、当社予想は同1.1%)通りの結果となった。出荷指数は前月比2.5%と5ヵ月ぶりの上昇、在庫指数は前月比▲1.7%と2ヵ月連続の低下となった。

11月の生産を業種別に見ると、在庫の大幅な積み上がりが続いていた情報通信機械は前月比▲5.0%と大きく低下したが、エコカー補助金終了後の国内販売の反動減から大幅な落ち込みが続いていた輸送機械が前月比4.4%と7ヵ月ぶりの上昇となったほか、電子部品・デバイスも前月比3.1%と6ヵ月ぶりに上昇した。速報段階で公表される16業種中、12業種が前月比で低下、3業種が上昇(1業種が横ばい)となった。



財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷(除く輸送機械)は前月比▲1.5%(10月:同2.8%)となり、10月、11月の平均は7-9月期よりも1.6%高い水準となっている。また、建設投資の一致指標である建設財出荷は前月比3.0%(10月:同▲3.0%)となり、10月、11月の平均は7-9月期よりも1.4%高い水準となって

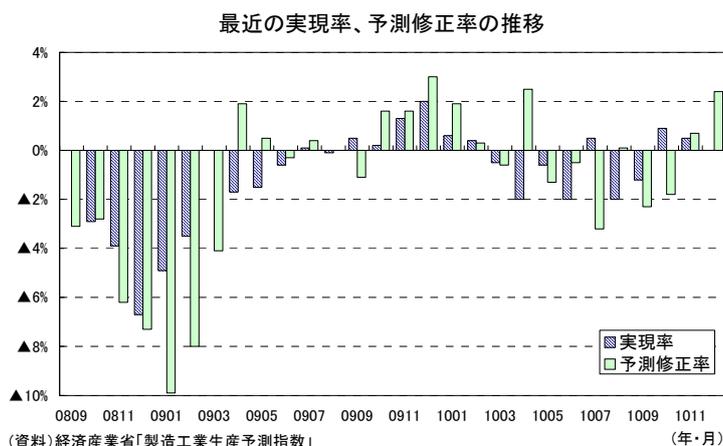


いる。GDP統計の設備投資は09年10-12月期以降、4四半期連続で増加しているが、足もとも増勢基調が維持されていると考えられる。

一方、消費財出荷指数は前月比3.3%と3ヵ月ぶりに上昇した。ただし、10月に前月比▲5.2%と大きく落ち込んでおり、10月、11月の平均は7-9月期よりも▲3.4%低くなっている。GDP統計の民間消費は7-9月期には前期比1.2%の高い伸びとなったが、10-12月期は反動減を主因として大幅なマイナスが避けられないだろう。

2. 10-12月期は減産不可避も足踏み状態は脱却へ

製造工業生産予測指数は、12月が前月比3.4%、11年1月が同3.7%となった。生産計画の修正状況を示す実現率(11月)、予測修正率(12月)はそれぞれ0.5%、2.4%となり、ともに2ヵ月連続でプラスとなった。生産計画の上方修正は、最終需要の持ち直しが企業の想定をやや上回っていることを示唆しており、生産の先行きを見る上で明るい材料と言える。ただし、参考として公表されている原指数による実現率(10月:▲0.4%、11月:▲0.5%)、修正率(11月:▲0.2%、12月:0.5%)で見ると、生産計画の実数が明確に上方修正されているわけではないことには注意が必要だ。



予測指数を業種別に見ると、7ヵ月ぶりに前月比でプラスに転じた輸送機械は12月が前月比4.8%、11年1月が同7.3%と明確な増産計画となっている。また、在庫調整から弱めの動きが続いていた情報通信機械(12月:前月比6.5%、1月:同3.7%)、電子部品・デバイス(12月:前月比3.9%、1月:同2.8%)も強めの動きとなっている。なお、輸送機械は5月以降の6ヵ月間で約2割の減産となったが、今回の生産計画に基づけば10月からの3ヵ月間でそのうちの7割程度を取り戻す形となる。

11月の生産指数を12月の予測指数で先延ばしすると、10-12月期の生産指数は前期比▲1.6%の低下となり、鉱工業生産が2四半期連続で減産となることは確実である。しかし、これまで生産の足を大きく引っ張ってきた輸送機械の底打ちが明確となり、IT関連業種(情報通信機械、電子部品・デバイス)の在庫調整も限定的にとどまっている。生産は12月以降も上昇基調が続く可能性が高く、景気は夏場以降の足踏み状態を脱しつつあると判断される。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。